



運  
氣  
指  
針



# 年中運氣指南

新刊

年中運氣

年中運氣指南序

秋夜文板堂に遊びを談酌酒餅子  
きよ書師の曰五運六氣の法を撰  
医家の之を知らざる人其れを疎  
でむ。歲中其風雨寒熱穀菜菓の  
多少盛衰を察して。益の自も  
りし者欲も請わたり用て。運氣の二軸  
を以て。今して。意を消道を知し。其れを

余額之去... 中運之指南の一巻... 敢て博識の... 戲玩と云ふ事

時正徳四甲午年又二室日

耕筆於攝生堂

華洛隱園園長為竹一抱子



年中運氣指南

目錄

- 歳之運氣操用の事
○年に異名有事
○年の上中下吉凶の事
○五運各主氣象の事
○客氣立様の事 並ニ主客の圖
○運氣の一年の事
○年中の運氣の大槩を知事

○主客六氣各主氣象の事

○主客の六氣上下の事

○主れ六氣の事

○年の十二支と以年中此氣とみる事

並ニ年中の五穀善惡の事  
付毎年雨風を知事

○十干みて年之氣と見事

○年中の雨風善惡と占事

○正月朔日の雨風と以年中此善惡と占事

○旱魃に雨と祈法の事

○酉の日は風有の事

○二百十日二百九日放生會は風有の事

○八十八夜名残の霜の事

○半夏生れ事 並此日毒降俗説の事

○入梅の事 並栗花落の俗説の事

○二季れ彼岸の事

○十方暮の事 付天一天上

○八專れ事 並ニ八專れ火でざるの事  
付癸亥の後の事

○土用の事 並土用御日の事  
付土用に灸でざるの事



らぬ氣なりと云く此と主氣との也又客氣と  
いふ其年を十二支に従て毎年いつかある所  
の氣也故に客氣と云ハ論客人かみし客人ハ毎  
月いつかありて定らざれば也此いつかある客  
氣が主氣の上小かば故四時の寒熱風氣万物を  
多岐に變わば事也又其客氣中ふ又司天在  
泉とて頭に成所の氣が兩わつて上半年其  
司天を氣と專小行ひ下半年ハ其在泉の氣  
と專入り行事なり又極又運と云く其年の干

干に従て運所を五行わつて此運が先年中  
の總司ふして此氣と專に行事なり論ハ  
運ハ國主也司天在泉ハ家老なり其外の氣  
ハ未く奉行乃様うら者と知ぬ故に  
先運と定て其年中の總際と考次小司天在  
泉と繰て運と引合せ其順逆吉凶と察し次  
に客氣と主氣との組合を以て何日より何  
月までハ此の氣わつて干中の細やかなる  
ことと候ひ其上に運氣の太過不及勝復節

癸と考く、年中の寒熱風雨、物多岐と云に  
毛頭違のほ事なると也

○年異名有事

甲ノハ土運 太過也此と敦阜年と云雨澤を盛なり  
不及也此と早監年と云雨湿の状なり  
乙ノハ金運 太過也此と堅成年と云冷燥の盛なり  
不及也此と從革年と云冷燥れ状なり  
丙ノハ水運 太過也此と流行年と云寒水の盛なり  
不及也此と涸流年と云寒水の少なり

壬ノハ木運

太過也此と發生年と云風温の盛也

丁ノハ火運

不及也此と委和年と云風温を少也

戊ノハ火運

太過也此と赫曦年と云暑熱の盛也

癸ノハ火運

不及也此と伏明年と云暑熱の少也

○右の外に平氣と云あり。此ハ後を十干にて  
年の氣と見篇と云く考ハ知ほなり。太過は  
不及に、此にて平等和調の年也

○木運

敷和年と云風温の平なり也

○火運

升明年と云暑熱の平なり也

○土運とん 平氣ハ備化年と云備化年と云 雨濕あめしつ 平年なり也  
 ○金運きん 審平年と云審平年と云 冷燥れいそう の平なり也  
 ○水運すい 順静年と云順静年と云 寒水かんすい の平なり也

○年の上中下吉凶此事

甲こう 子午しご 八中はちちゆう の下年也 甲こう 辰ちん 八中はちちゆう の上年也 ○丙ひやう 寅いん 八下はちげ の凶年也 丙ひやう 辰ちん 八中はちちゆう の年也 ○戊ぶつ 寅いん 八下はちげ の凶年也 戊ぶつ 辰ちん 八中はちちゆう の年也 ○庚かう 寅いん 八下はちげ の凶年也 庚かう 辰ちん 八中はちちゆう の年也 ○壬にん 寅いん 八下はちげ の凶年也 壬にん 辰ちん 八中はちちゆう の年也

八中はちちゆう の下年也 ○乙い 卯まう 八上はちじやう の吉の年也 乙い 卯まう 八中はちちゆう の年也 ○丁てい 卯まう 八上はちじやう の吉の年也 丁てい 卯まう 八中はちちゆう の年也 ○己こ 卯まう 八下はちげ の凶年也 己こ 卯まう 八中はちちゆう の年也 ○辛しん 卯まう 八上はちじやう の吉の年也 辛しん 卯まう 八中はちちゆう の年也 ○癸かい 卯まう 八下はちげ の凶年也 癸かい 卯まう 八中はちちゆう の年也

○五運各主氣象之事

○土運ど 化ハ湿雲雨しつうんう 万物ばんぶつ と化育くわよく して長ドなが 茂さか 實み



いづれ満く平うに土用の氣象と致也黄色耳味稷稷  
粟一切の肉厚物保虫と致也保虫の中也運の太過  
不及小從く此に多蚩の分わはなり  
○金運ハ燥冷曇て清と霧露万物と枯凋て舒と  
季と茂らんと秋氣象と致也白色辛味糯桃一切  
の穀堅物介甲の保虫と主也運カ太過不及小從て  
此より多蚩の別は保虫と

○水運ハ寒凝雪霜水霜雨水類万物の肉藏て顯  
目こと季と冬の氣象と致也黒色鹹味豆粟一切

の水氣の保虫と主也運の太過不及に  
從て此に多蚩のつ

○木運ハ風地震温和万物の発き生ト宋茂  
つて舒に春の氣象と致也麻李一切の中に  
核の堅わは物蒼色酸味毛わは虫と主也運  
の太過不及に從て此に多蚩の別はなり

○火運ハ暑熱万物の栄蕃つ昌に夏の氣  
象と致也赤色苦味麥杏一切の脈絡の保物  
類羽の保虫と主なり運カ太過不及に從て

此に多岐の別あり

○客氣立様之事

客氣ハ其年の十二支と決りて司天在泉と極く在泉の左間と初氣と一司天の右間と二の氣と一司天と直ふ三の氣と一司天の左間と四の氣と一在泉の右間と五の氣と一在泉を直に終氣とすなり



先其年の十二支と以て其年を司天と定め  
其司天と主の三之氣の所へ合せく今年を  
何月より何月までと客ハ何の氣主ハ何の氣  
か主ふ程に此間ハ必此の氣が行くところを  
とと考見しつり。鬼角客の氣と主氣との  
取合と考る事なり。假令子午の年なれ  
バ少陰君火司天とて此と主の三之氣  
合く見バ在泉ハ左間太陽寒水初の氣  
と成く主の初の氣厥陰風木に合ふ故去

年十二月より當年二月ままでの間ハ寒水と  
風木とが主ふ程に寒風はゆくと候ふなり。  
叔司天の右間厥陰風木が二の氣となつて  
主の二の氣少陰君火に合ふ故二月より  
四月はでのるハ風木と君火とが主ふ程に風  
と吹温はして木も能生とと候ふ也叔司天  
少陰君火が三の氣となつて主の三の氣少陽  
相火に合ふ故四月より六月までのるハ君火と  
相火と兩火が主ふ程の大暑熱行つれど金石

も燥はほかに甚るると候ふ也。扱司天の左間太陰湿土の四の氣と成く主の四の氣太陰湿土の合は故六月より八月ままでのるは湿土が兩合也。主は程に湿つゆく。大雨降天曇と候ふ也。扱在泉の右間少陽相火の五の氣となりゆく。主の五の氣陽明燥金に合は故八月より十月までの間ハ相火が燥金と制て主は程に此時秋となれども猶炎暑て草木も栄と候ふ也。扱在泉陽明燥金が終の氣と成く主の終の氣太陽寒水

に合は故十月より十二月ままでの間ハ燥金と寒水とが主は程に金の燥氣と冷氣と水の寒氣とが行りゆく甚るる寒冷なりと候ふなり。毎年皆此例と以て候見ゆ也。猶後の十二支は年々の氣と見の篇に年と主客六氣の候ひ詳に記と考へ見ゆ。

○運氣一年之事

凡曆の一年ハ正月朔日より十二月大晦日ゆる三百五十四日二十七刻の一年なり。運氣の二

年八前の年の十二月の中大寒の日より復當年  
の十二月の中大寒の日まぐ三百六十五日二十  
五刻の一年なり其故に十二月の中大寒の日か  
らハ蚕来年の運氣と決く候ふしとより凡主  
の六氣客の六氣離て數少ハ十二氣かれども  
主客兩氣宛合く一年と主は故一年三百六十  
五日二十五刻と六段に分く主客の六氣が主  
は事也然ハ一段が六十日八十七刻三十分宛也  
假令主客の初の氣が年前十二月の中より當

年二月の中まで六十日八十七刻三十分と主  
と主客の二の氣が二月の中より四月の中は  
と六十日八十七刻三十分と主は餘氣皆如此  
はと主客の六氣相より一歳三百六十五  
日二十五刻と總は也

○年中運氣の大槩と知事

凡年の客氣司天在泉ハ其年の十二又より  
定は也運八年の十干より定は也其年の上中  
下善惡と知ハ先其年の司天と上に建運

と中に建在泉と下に建く。上中下三段の五行相生相剋と考て其年の善徳の大槩と知べし。假令甲子午の年かまきハ。

此年と總く敦阜と号す。

○司天少陰君火 運土太過 在泉陽明燥金  
此年司天の火より運の土と生じ運の土より亦在泉の金と生じ上中下皆五行の相生順なり故に順化の年とこと然とも甲ハ本

土の盛也此に司天の火より養時ハ土氣彌進て太過に至る故に中の下年とこと夫火の氣ハ熱土の氣ハ湿雨金の氣ハ冷也此年ハ土の太過かまきハ湿つよ雨ふげし此に司天君火の熱と加て湿熱盛の年とこと又在泉ハ下半年と主は然ハ此年下半年ハ燥冷つよしとこと又土太過して亢了水に勝時ハ水の子の木起く母土の爲に怨と仕復と此と勝復とつらら其仕復ハ下半年に在然ハ此年雨

湿にゆくして下半年の比に大風の變るはべ  
と事と知る。毎歲皆此例と云く其年の  
吉凶大槩と候ひ其上に一歲六段の主客各行  
ふ所の氣令と察す。十干に属は運の氣と考  
く。天地四季寒熱風雨五穀五菓五畜五虫五  
色五味の多少盛衰等と候ふべし也。或問正  
德四年甲午八月陰君火の司天土運の大過也。  
故に濕熱はよく雨多く降。此濕土の勝也。七月  
上旬に風吹屋と損ひ州木と折。此木氣の仕復

也。然に復八月上旬中國に大風起り屢屋と  
破り州木と摧え河海行流く。岸崩人と損  
ふ者ハ何ぞや。曰初の二復弱して復一盡  
ざれば再勝再復と。其再復や。初と初  
復に倍と。故に年と候者ハ此義の事  
と知く復氣少くハ必と再復の甚こと  
と察へと。或又同勝復の氣ハ一歲の運  
いのと有や。曰獨運の勝復の比に總  
一時一月の比に。況主客六氣の上にも

各此勝復の氣わくどとりやとる。風の後は  
必涼しく。涼の後ハ必熱く。熱の後ハ必寒雨  
あつ。雨湿の後ハ必風多。寒の後ハ必霜雪  
化り。此皆勝復の氣わくどとりやとる  
と知る

○主客六氣各主は氣象之事

○厥陰木氣ハ風温和或地震總して春の氣  
象と致と。万物の發生。榮茂。舒る。はと  
と行ふ也。麻李一切の中に核の堅むは物蒼

色酸味毛の浮虫とけくさざるなり

○少陰君火の氣ハ温く烈く熱せど。三

月の氣象と致と。万物の榮蕃。昌る。しと

と行ふ也。麥杏一切の脉絡の類。わは物赤色

苦味羽の浮虫と主は也。此羽の浮者ハ鳥の類

○少陽相火の氣ハ暑熱烈く甚く。入六月の

氣象と致と。万物の榮蕃。昌る。しと。と

ころりなり。麥杏脉絡の浮物赤色苦味羽の

虫と主はなり。此羽の浮者ハ蠅蚊蜻蛉の類也

の類也。一年の者也



○太陰土の氣ハ温雲雨万物と化育く長し  
茂らせ實いつと能満しと致と也稷稷束  
一切の肉厚物黄色甘味裸虫と主也人無虫の中なり  
○陽明金の氣ハ燥冷曇く清と霧露万物は  
枯凋く舒と季と茂と秋の氣象と行ふ  
也糯桃一切の殼堅物白色辛味介甲の浮虫  
と主ふなり

○太陽水の氣ハ寒凝雪霜氷雹雨水万物の  
閉藏く頭れと発と冬の氣象と行ふなり  
と主ふ也以上の氣象ハ主氣ハ客氣  
も同車なりてりわりなりと知べ

○主客の六氣上下の氣

凡主氣ハ地の属と故に下は立し。客氣ハ  
天の属と故に上に位し。客氣ハ主氣の上  
に加りりて行也。此故に年中の氣化ハ客氣  
の働カ專に見せ行りり。大法客氣が  
主氣に勝ハ順とと主氣が客氣に勝ハ逆と  
するなり。此主客の氣にも各勝復の争ひ有

しとどかむいふかつと

○主六氣之事

○主初の氣厥陰風木 前年の十二月の中より當年二月の中までとせしむるなり  
此時風行しれ地下温いしと州木も萌生し  
雪霜氷も次第にうすく解虫も見ま出  
んとし春氣次第に顯は世俗よ小寒の氷が  
大寒に解といふと此節の氣といふなり○客  
の在泉左間の氣とれと俱り重つと加つとて  
行つたり

○主の二の氣少陰君火

二月の中より四月の中までとせしむる也

此時和に温かり州木の枝葉も蕃つと花さ  
とと発春の氣專に初しと萍も生と蟻蟻  
鳴るりの客の司天右間の氣とれと俱り重  
つと加つとてとこなりなり

○主の三の氣少陽相火 四月の中より六月の中

此時炎の如と甚と暑熱はつとと州木榮茂  
つと種ゆと苗と入蟪蛄生し廉解と解て夏  
の氣專に初しと客の司天の氣とれと

俱に重つて加つてくはるなり

○主の四の氣太陰濕土 六月の中より八月の中までとせざるなり

此時雲もよどし雨降蒸たてて滌暑し虫

生じ然ども夜露降間に涼ら風わつて火

く秋の氣見也○客の司天左間の氣これ

俱に重つて加つてくはるなり也

○主の五の氣陽明燥金 八月の中より十月の中までとせざるなり

此時涼はく。万物皆燥枯凋霜降秋の氣

專に行はるなり○客の在泉右間の氣これ

俱に重つて加つてくはるなり

○主の終の氣太陽寒水 十月の中より十二月の中までとせざるなり

此時大寒氣行し雪霜零降水氷つて虫

藏く冬の氣專に行はるなり○客の在泉

氣これ俱に重つて加つてくはるなり

夫右の主氣ハ毎歲四時の常氣かりりざる

者也然ども此上小毎年いづからる所の客

氣が加はる故に春夏の温熱なる毎此時

冷秋冬の冷寒かりる時に温るるを致

其外時々ね花さとし実のつし或ハ時み  
らの雹雪降或ハ大雨洪水大風大旱等の  
變わは者ハ皆客氣と運との所行なり故  
に年の氣と候者ハ主客六氣の組合せなる  
所の働と五運の太過不及勝復の働とと詳  
しく考見ぬま也

○年の十二支を以て年中の氣と見事  
以下に建所の氣ハ客の六氣なり其  
働ハ主客組合せなる所の氣令と知

海に此に記所ハ十二年也と雖ど  
も此を以て千萬年を候ぐも同  
し也

後の十干を以て繚所の五運も同事と

知るべし

子午年少陰君火の司天陽明燥金の在泉  
也○此年上半年ハ熱し下半年ハ燥く雲  
北に馳じりい湿行り雨時に從て降寒熱  
天地の間に持てく人の病此よりして生じ上

半年ハ丹色の物盛に下半年ハ白色の物  
 盛也上半年ハ羽の虫と裸虫とハ生し介甲  
 の虫ハ蛭し下半年ハ介甲の虫ハ  
 能育毛の虫ハ耗上半年ハ苦物其物盛に  
 辛物蛭し下半年ハ辛物其物盛に酸物蛭  
 初氣太陽寒水の去年の十二月の中より當年  
の二月の中まこと主はなり  
 此間寒はよく行われ春にたりとも寒  
 あと去どろろ雪霜降る春の陽氣のび  
 推して中木も遅らる虫も蟄く見れど

間に寒風烈く吹二月末に至る温氣とこ  
 る人身ハ腰尻痛手足疼て伸屈し難しと  
 病やと

一氣厥陰風木二月の中より四月  
の中まこと主はなり

此時間に風吹温は春陽の氣行く行  
 き中木よく栄生し人氣も和つて病と  
 若病ハ淋病眼病風症上熱と患は也

三氣司天少陰君火四月の中より六月の  
中まこと主はなり

此時に炎熱甚く行はれ金も石も燥は如

万物蕃く盛に生じ間に時々の寒気  
のつこく風吹人身も風熱の病のつこて寒熱往  
來し欬喘心痛氣上眼赤しと患は也

**四氣** 太陰湿土

六月の中より八月

此時に湿熱盛に〜溽暑至雨大に〜  
降寒熱たぐひに行われ人身も湿熱と病て  
寒熱往來嗌乾衄血湿疹黃疸と患は也

**五氣** 少陽相火

八月の中より十月

此時秋冬の季と雖炎暑かど盛に行われ

万物反く長し衆人氣康らうらりと雖火熱  
の病と患瘟疫とともといり

**六氣** 在泉陽明燥金

十月の中より十二月

此時に燥氣専ら行われ冷寒〜  
十月十一月の比に間に熱化殘行りる冷寒盛に  
行は時ハ冷氣人の肌に透天氣〜  
のほく鬱入身し鬱熱の症皮膚の病上腫上  
あり血溢脇少腹の病又中寒等と患は也

▲**丑未年** 太陰湿土司天太陽寒水在泉也○

此年上半年ハ湿下半年ハ寒と天氣昏蔽  
 く白湿氣四方に起雲南方に奔じりて寒  
 雨ふげく至カ物ととく立秋の後に霖と  
 冬寒雪盛に氷雹降上半年ハ黄色なる物  
 耳物湿のほ物ハ盛に玄物鹹物ハ状一下半  
 年ハ玄物鹹物盛に丹色の物苦物少一上  
 半年ハ傑虫ハ靜に羽のほ虫ハ成と下半年  
 ハ鱗のほ虫ハ育羽のほ虫ハ耗傑虫ハ育と  
 一入身も上半年ハ風湿熱の病のりく脹

満腫氣等と患下半年ハ湿熱火症冷寒の病  
 のりく手足冷或ハ急引又ハ痞等の疾と  
 致と

**初氣厥陰風木**

去年の十二月の中より  
 壽年の二月の中までと主候也

此時春陽の氣至て温に風吹木よく生  
 一榮雨時節に後ま人の氣も舒やう也病  
 ハ風病血症筋の疾と患

**二氣少陰君火**

二月の中より四月  
 の中までと主候也

此時大火熱正く行りれカ物よく化れ人氣和と

雖温疫大に行りたることわ利

**三氣** 司天太陰湿土 四月の中より六月の中までとつらところあり

此時湿氣行りしれ雨降雷電し地氣蒸たてて人身湿病あつて身重く腫脹しと患

**四氣** 少陽相火 六月の中より八月の中までとつらところあり

此時蒸きとて大に熱中木の石にも烟出湿氣あつて秋の季に入るとも冷氣運し時うつりて雨降人身も熱火の病あつて血症瘰腫脹腫物の患と致すと

**五氣** 陽明燥金 八月の中より十月の中までとつらところあり

此時冷氣とびく人の肌は透露霜降州木黄ぐと落く人身にも燥症皮膚の病有

**六氣** 在泉太陽寒水 十月の中より十二月の中までとつらところあり

此時寒氣大に行りしれ温陽の化吹く霜雪厚降水堅氷人身も寒病あつて筋骨下と腰腫痛しと患

▲**寅申年** 少陽相火司天厥陰風木在泉也

此年上半年大に熱して火の流が如下半年



ハ風大に吹沙飛り木偃涼雨並行する上半年ハ  
丹色の物若物羽の浮虫ハ盛に白色の物平物介  
甲の浮虫ハ状一下半年ハ蒼色の物酸物毛の浮虫  
ハ盛に黄色なる物其物濕の浮物火く保虫ハ耗羽  
の浮虫ハ育難一此年人身ハ熱病風腫物泄瀉腹  
脹瘧疾頓死者の利

**初氣** 少陰君火 去年の十二月の中より當年  
の二月の中までとつらさなり  
此時大に温にり木蚕采殘寒も早去人身に時  
疫温病起上下より血出目赤頭痛欬腸滿腫物

の敷わ利

**一氣** 太陰濕土 二月の中より四月  
の中までとつらさなり  
此時に濕熱節一雲北方に遶こも風有ども濕  
乾として雨零と雖ども時節と行にり人氣  
康なり病ハ上熱咳吐逆頭痛濕瘡等と患

**三氣** 司天少陽相火 四月の中より六月  
の中までとつらさなり  
此時に甚き大暑熱行すく雨降と河乾木  
も乾さ枯く濕氣晚く行り人身も熱病頓死  
耳聾耳眼病咳衄渴血症の病わ利

**四氣** 陽明燥金 六月の中より八月の中まよとつらきころなり  
此時雨湿行ゆれども乾やとく秋の氣盛行霧露のゆく冷まりと雖ども人氣ハ和平なり病ハ腫脹の症あり

**五氣** 太陽寒水 八月の中より十月の中まよとつらきころなり

此時に寒氣早來剛木も蚤凋雨降やとく人身も寒氣に閉みれ易傷易故に養生人ハ此時の寒氣と防ぐ

**六氣** 在泉厥陰風木 十月の中より十二月の中まよとつらきころなり

此時に寒風烈く吹霜霧いつつ惟木反て生ト人身も風寒氣と得く頭痛咳泄瀉眼疾等有  
▲卯酉年陽明燥金司天庚辰君火在泉也○  
此年上半年ハ燥と涼に下半年ハ温に冬も水氷ららる也上半年ハ白色の物辛物介甲の虫ハ盛に蒼物酸物毛の虫ハ秋ハ下半年ハ丹色の物苦物羽の虫ハ盛に白色の物辛物介甲の虫ハ秋ハ下半年ハ涼燥より病を致下半年ハ風濕より病を致總して

此年の病ハ卒暴也

**初氣** 太陰湿土 去年の十二月の中より 當年の二月の中より

此時に湿化行じ曇り清き雨降風ことあり。人身も内熱湿症と病腫氣熱脹泄瀉等と患

**二氣** 少陽相火 二月の中より四月

此時大に温熱して万物生じ衆人の氣舒るなりと雖ども瘟疫大に起りて有る人暴に死とら者あり

**三氣** 司天陽明燥金 四月の中より六月の

此時夏と雖ども冷に燥氣行じ後反て雨澤人身も寒熱の病瘡疾等あり

**四氣** 太陽寒水 六月の中より八月の

此時に寒して雨降寒湿に物損傷あり。人身も瘡疾熱症腫物心痛暴病等と病

**五氣** 厥陰風木 八月の中より十月

此時に冷風吹き交り温に木春の如に衆人氣和病ハ風症あり

**六氣** 少陰君火 十月の中より十二月

此時冬の季と雖も温い〜虫も見れ  
水と氷〜ど人氣も康なり。若くは温病起し有  
▲辰戌年 太陽寒水司天 太陰湿土在泉也。  
此年上半年ハ肅く寒澤ほどよ〜雨さ  
して暴雨あり〜。雷鳴下半年ハ雲北方に  
朝湿つ〜物湿係上半年ハ玄色ノ物鹹物  
鱗河係虫ハ盛に黃物其物保虫ハ火〜下  
半年ハ黃物其物保虫ハ盛に玄物鹹物火  
く鱗河係虫ハ耗弱河係虫ハ育す。此年人身

に寒湿の病わつ〜。上半年ハ寒病下半年  
ハ湿病也

初氣 少陽相火

去年の十二月の中より  
當年の二月の中より

此時大に温い〜。州木蠶桑人身発熱頭  
痛疫厲温熱病起多腫物の患あり

一氣 陽明燥金

二月の中より四月の  
中より

此時春夏と雖も大に涼〜温氣発し温  
と冷と時〜と行〜れ秋の如く州木の  
人身も冷病腹脹と病

三氣司天太陽寒水四月の中より六月の中  
此時大に寒氣行りしれ雨降暑氣少く雷  
なり氷雹あり人身も寒氣と得て死  
爵熱し癰疽腫物等と病此時元氣不足  
の人ハ尤養生と云べし

四氣厥陰風木六月の中より八月の中  
此時に風吹て物と損ひ雨降万物生れ人  
身も風濕の病ありしれ肌肉手足痿痺赤  
白痢病と患

五氣少陰君火八月の中より十月の中  
此時秋冬の季と雖ども温いりて木長  
人氣も舒也と雖ども熱病葉流

六氣在泉太陰湿土十月の中より十二月の中  
此時湿はよく行りしれ天曇く清く雨ふげ  
降て寒風至人身も寒温に悽て病此より  
生じ

己亥年 厥陰風木司天少陽相火在泉也  
○此年上半年ハ風吹下半年ハ大に熱あり

冬と雖ども熱して水氷らんと虫見たり人  
身も上半年ハ風病上に起下半年ハ熱病  
下に生と上半年ハ倉色の物酸物毛のほ虫  
盛ん。黄物其物湿あふ物保虫ハ少下半年  
ハ丹物苦物羽のほ虫ハ盛に白物辛物介申の  
ほ虫ハ少

**初氣陽明燥金**

去年の十二月の中より  
當年の二月の中まで也

此時春のりくくし冷寒肅く霧露しげく  
天清ずして中木のび難く人氣も舒ずして

冷病生じ右の脇の下の病あり

**二氣太陽寒水**

二月の中より四月の  
中まで也

此時春夏の季と雖ども寒残く雪霜降中  
木の枝葉枯然ども根枯ども寒雨行りぬく  
後温陽見れ物生じ人身も外にハ寒邪と  
犯内にハ暑熱と病

**三氣司天厥陰風木**

四月の中より六月  
の中まで也

此時風大に吹熱く人身も風熱の病ありて  
眼疾泣出眩頭痛等と患ほたり

四氣

少陰君火

六月の中より八月の中

此時濕熱

いへく溽暑し山澤湯氣をくら

暴雨

あも人身し濕熱と病く黃疸腫氣を患

五氣

太陰濕土

八月の中より十月の中

此時燥と湿

と更行りて天曇く清と雲北

に趨ら

も冷雨行りて人身し冷温の病のつ

六氣

在泉少陽相火

十月の中より十二月の中

此時大に熱

さ水も氷らと虫も見まき万物

発生して

木も生じ人氣も舒やうり

と雖ども温疫厲起しと有

○十子にして年の氣と見事

甲の年

土運太過也此年と總て敦阜と

号

○甲子甲寅ノ四年ハ司天が少陰少陽の

君火相火

いへく火生土と相生する故に順化

の年と

○甲辰の二年ハ司天太陽寒水

いへく土尅水

故に不和の年かつと雖ども

年の運と支と合

し。在泉の五行と合する

が故に歲會

とも同天符とも号して平和の

年ととも也○此敦阜の年ハ湿盛にして  
 天曇大雨降泉涌河行潤をうる澤にして魚  
 と生し鱗陸に見せ物湿濡ふ万物能長  
 肌能充若年の変ハ暴に風雨至つて地震山  
 岸崩ふしと有穀ハ粳米稷よく糯米尤も  
 よし果ハ枣よく李ハ中も總じて色黄  
 なる物其物よくして色玄物麻ハ中也鹹  
 物少し蒼物酸物ハ中分也豆と栗とハ  
 少し總じて肉厚物よく内に核堅るは

物ハ中也畜ハ牛盛に人し亦多生犬と毛のほ  
 虫とハ中分也鱗のほ物ハ少しと○甲辰の三  
 年ハ歳會同天符よく太過さうと不及  
 さうと平らる年也号く備化の年といふ  
 年の氣順よく万物満湿の化平に行  
 ぶを種糯稷枣其物黄物肉厚物よく生  
 ど總じて土地の化宜く調とこと○此十  
 手とひく考は所の運ハ其年中と總て  
 気さう又前に十二支とひく考は所



の六の氣ハ其年中と六段にわけて細に  
察所也故に其年の十干を以て運を  
定くる年中の大綱と考又其の十二支を以  
て六氣と定くる何用ハ如此とありと察  
しと毎年の運氣と知也○凡甲丙戊庚  
壬の年と太過とあり太過にハ年の氣進  
盛にくと春の氣も發去年の中より萌夏の  
氣も發三月より萌秋の氣も發六月より萌  
の氣も發九月より萌と也又し丁巳辛癸の

年と不及とあり不及にハ年の氣後で  
進と春の氣も正月末に萌し夏の氣も四  
月末に萌し秋の氣も七月末に萌し冬の  
氣も十月末に萌と也又平和の年とありハ  
四時の氣能調つと其時節に進と後と風  
雨も順に万物も能調は年也總して年中  
の平等調和ありと知也○下皆此例に  
あてり考見べしなり

▲丙の年 水運の太過也此年と總て流行と

号○丙辰の二年ハ司天太陽寒水にして司  
天と運と同氣故に天符と号して順化の年  
とこと○丙午子寅の四年ハ司天が少陰少陽の君  
火相火にして運と相尅す故に不和の年  
とするなり○此流行の年ハ寒盛に凜天地  
の氣嚴く凝雪霜厚降万物も栄殖舒難と  
と若年の変ハ時々と大雨湿あつことと穀  
ハ豆よく稷ハ中分なり果ハ栗よく棗ハ中も  
總して色黒物味鹹物よく色丹物苦物ハ状

黄なる物其物ハ中分なり麥と杏とハ状も總  
して水氣の係物よく肉滿なる物ハ中也云  
氣ハ盛に鱗の係虫多く羽の係虫と馬とハ状  
とこと○丙辰の二年ハ天符にして太過なり  
不及なりす平なる年也号して靜順年と云  
年の氣順和して寒すくハ雖も甚し  
と豆栗黒物鹹物水氣の係物よく生こと○丙  
午寅ハ不和の年にして天地の氣和合せざる  
故に年中の氣化調らざるして万物の生育し

平なりざる也

▲戊の年

火運の大過なり此年と總て赫曦

と号す

戊の四年ハ司天少陰少陽の君

火相火に

て司天と運と同氣故に天符と号

て順化の年

と号す戊辰の二年ハ司天太陽寒

水に

て運と相尅する故に天刑と号す

和合せど

と雖も火運の太過と司天の水より

制ぶ

故に反て火運平和の年とする也此

赫曦の年

ハ炎暑烈く沸騰と号す物も茂

穀秋冷の氣ハ時節に後遅し。若年の變ハ  
 時々ぬ大雨氷雹霜降と有とと穀ハ麥  
 豆ハ中也。粳糯ハ秋果ハ杏ハ栗ハ中也  
 桃ハ秋とと總して色赤物味苦物。色白  
 物味辛物ハ秋ハ玄物鹹物ハ中也。畜ハ馬ハ盛  
 んに羽の係虫多介甲の係虫と雞とハ秋とと  
 戊子寅の四年順化に。天符とと。戊の二年  
 尤とし太過とと不及とと平なる年  
 とと号す。升明の年とと。年の氣順和に

暑熱盛と雖どし烈くも万物之茂  
 深く高く長くと麥杏色赤物味苦物よ  
 く生と總じて脈絡の物ハ宜とと絡脈  
の物とハ絲瓜○戊午申の二年ハ天符順化と雖  
 どし年の氣ハ中分也戊辰の二年尤と平  
 和の年と知る  
播下の子の終の年の氣の書  
 總上中下と詳に別考合息  
 ▲庚の年庚子寅金運の太過也此年と總く堅成と  
号○庚午申の四年ハ司天少陰少陽の君火  
 相火少陰の運と相尅とらぐ故に天刑と号す

和合せどと雖どし司天より運の太過と制  
 故に金運の平氣と成也子の二年ハ運と  
 在泉との五行同氣合す故に同天符と  
号と彌猶以平和の年とと○庚辰申  
 二年ハ司天太陽寒水の小逆の年と  
 と其故ハ金ハ水の母也母の金ハ運とかりて  
 下に居子の水ハ司天とかりて上に居此母と  
 子と居所の上下違たはとは逆とすはと  
 ハ雖どし本相生故に小逆といふ也大逆の年に

ハわつど中分の年とと○此屋成の年に  
 ハ天地肅冷霧露冷風行せきみれ木枯凋しんで  
 陽生やうせい一難いちなんく秋氣盛也若年の麥ハ時とき  
の炎熱えんねつあつとく金石きんせきも燥そうが如ごとく蔓ま中ちゆうも稿こう  
 とすほが如ごとく有とと穀ハ粳じやうより糯米なまい亦と  
 ともし。麥ハ中也麻ハ狀とと果ハ桃とうより杏あん  
 ハ中也李ハ狀とと總そうして色白物味辛物よ  
 く。色蒼物味酸物ハ狀とと丹物苦物ハ中也  
 畜ハ雞けい成せいに介甲けいこうのほ虫ハ多た犬と毛けのほほと

ハ狀とと○庚けい午ご申しんの四年ハ金運の太過と司  
 天の火より制せいほが故ゆゑに反ひらく金運平和の年と  
 とも号ごうて審平の年とつゝ年の氣順和きじゆんわはく  
 天地清冷てんちせいれいらると雖なほとも亡なに枯かく殺ころさると惟たゞ  
 秋風あきかぜの吹落ふきおちの化くわわほのも然しか万物ばんぶつの生長せいちやうハ進しんて  
 常かみの如ごとくハわつど粳米じやうまい糯米なまい桃とうより生せいト色白  
 物味辛物ものあじうよりとと○庚けい辰ちんの二年も順和じゆんわ  
 つと雖なほとも右四年みぎしやうねんほど平へいはハわつど  
 ▲壬にんの年ねん木運の太過也此年と總そうくそん生せいと

号の壬子寅の四年ハ司天が少陰少陽の君  
 火相火にく小逆の年とと子細の位違  
 たり故也然とし本相生されバ大逆は  
 わらど中分の年とと謂の年にと右の庚〇此發生  
 の年ハ天地の氣温に開けく飛物舒やか  
 能生じ能榮草木羨しとと春氣の盛  
 か浮年なり入の氣し亦舒に生化と若年  
 の變ハ時なりぬ秋風吹冷に州木枯凋根ぬ  
 け枝折葉落くいじと有とと穀ハ麻

く稷糯ハ中分也稷ハ狀とと果ハ李よ  
 く桃中也粟ハ狀とと總とて色蒼物味  
 酸物と色黃物味甘物ハ狀とと色白物味  
 辛物中也畜ハ犬ハ盛に毛の係虫ハ多牛と  
 裸虫とハ狀し心身し減とと〇壬辰の二  
 年ハ司天が太陽寒水にく運と相生する  
 故に順化の年とと中分の年也〇壬寅の  
 二年ハ小逆と雖とし在泉の五行と合する  
 故り同天符と木運平和の年とと号

く敷和とりぬ也年氣宣平けしと温に和  
ひ万物よく生じ木榮麻李よく生じ  
蒼物酸物よくとこと。總して中に核の堅の  
浮物よくとこと。○右の甲戌庚戌の各  
辰の六年けしと主故に五六合して三十年  
也此三十年と五運の太過と陽年とこと  
凡此三十年天地の氣進亢と甚しとこと  
然ともし或ハ其年司天より制は時ハ平和に  
調は庚午贖ハ金の平氣と成戌辰ハ火の

平氣と成也平氣の年ハ一歳の寒熱温冷  
風雨燥湿し調つ。万物の生長化裁し宜く  
和と一切平等に行き過不及なく上の善と  
也。又年に勝復とりぬとあり至湿が元り  
勝ハ木風の仕復ありと木風が亢り勝ハ金燥の  
仕復ありと金燥が亢り勝ハ火熱の仕復あり  
火熱が亢り勝ハ水寒の仕復ありと水寒が亢り  
勝ハ土湿の仕復あり此と勝復とりぬと必元り勝  
キも後にハ仕復の復氣ありと平氣の年にハ

此勝復の事この勝復の事と知しべし。大低彼元大低彼元  
つ勝氣ハ上半年つ勝氣ハ上半年のつ仕復の復氣ハ下  
半年半年のつ。其故に五穀其故に五穀も上半年に能  
生長生長して下半年の風雨等下半年の風雨等に  
係係と有ハ此皆復氣の害する所此皆復氣の害する所なり。又丙  
辰ハ水の平氣と成辰ハ水の平氣と成甲辰ハ土の平氣と成甲辰ハ土の平氣と成  
午子寅ハ火の平氣と成午ハ火の平氣と成壬申ハ木の平氣と成壬ハ木の平氣と成  
ハ此或運と司天との五行ハ此或運と司天との五行が合あし。或運と在  
泉との五行泉との五行が合する故に平氣と成合する故に平氣と成ると

雖雖どし右の戊辰右の戊辰庚子寅の平氣の平氣ほどにい心  
ど中分の年ど中分の年とと。又甲子寅壬申ハ順化の  
年とと然然どし此此惟司天と運との五行相  
生生かるといふの故に順化と号号す耳耳。と  
平氣平氣にいつど甲子寅ハ其其終土運の太過  
と。壬申辰子寅ハ其其終木運の太過とと。此六年  
し亦中分の年也。○又丙子寅ハ俱俱に不和の  
年と。庚申辰子寅ハ俱俱に小逆の年とと。此  
八年ハ太過八年ハ太過のいと然然どしい丙年とと。○然然ハ





すべし北也己に金爵の発とらや八月の中秋  
分後に天地清潔大に涼燥氣行いれ霧厚  
く山木乾周土面霜鹵京風万物と吹鳴の凡  
此年ハ麻麥季杏よく一切苦物酸物脉絡の凡  
物の類丹物蒼物の類一稷糯と桃と白物辛物穀  
の堅物芒の凡物とハ川とと馬大毛の凡物  
は虫盛に雞介甲の凡虫ハ川とと然とし右の  
水の仕復と金の爵発との行くと凡の凡とて  
稷糯桃白物辛物穀堅物雞介虫俱に化と得と

善しとわつこと知ぬ一のひ不和の年と  
雖とし其一歳の化ハ死と木運平氣の令と  
成と年温に和ひ万物宜やりに能生し山木  
榮麻李子蒼物酸物一切中に核の堅の凡物皆  
能生と心とし勝復の半変氣しととと  
〇のし酏ハ天符はと金運平氣の年とと号  
と審平とつと天地清冷かりと雖としと  
枯一殺とと惟秋風の吹落の化の凡のと然と  
し那物の生長ハ迫と常の如いのりと稷糯

桃よく生ず。自物辛物よりとこと。○己未ハ順和  
の六年づくと主となりて五六合せと二十年也此  
と陰年とりぬ凡不及にハ天地の氣後て弱く  
其勝所の氣進負所の氣扶つて死と進あり。  
金不及なれば冷氣後と火の熱氣と風木の  
發生とが進火不及なれば熱氣後と水の寒  
氣と金の肅冷とが進水不及なれば寒氣後

と。土の濕氣と火の熱氣とが進土不及なれば  
濕氣後と風木の發生と水の寒氣とが進水  
不及なれば風氣後と金の肅冷と土の濕氣と  
が進也總して不及の年にハ其年中の四時寒  
熱温冷の氣し於物生長化收藏の氣し常  
より十五日余後と遅と知べし。又若其扶らる  
所所ありとて平氣の年と成時ハ四時万物の  
氣皆常の如從順ゆくと餘りくと遅りとさう  
也。○又不及の年にハ必勝復の争むると金不

及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く火熱勝時ハ水寒の仕復あつて水不  
及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く土湿勝時ハ風木の仕復あつて土不  
及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>て風木勝時ハ燥金の仕復あつて木不  
及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く燥金勝時ハ火熱の仕復あつて火  
不及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く水寒勝時ハ土湿の仕復あつて  
と此と勝復といふなり。彼平氣の年にハ  
此勝復の争ふ変氣あり又不及の年にハ  
爵発といふことあり。年の氣不及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く  
勝者に尅せり。極時ハ及<sup>レ</sup>起出

及<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>く此と爵発といふなり。天低勝氣  
ハ上半年にわつ。仕復と爵発とハ下半年  
にわつこと。此故に五穀五果五畜五虫の類  
上半年に善物及<sup>レ</sup>下半年に及<sup>レ</sup>損傷  
とわつ。或ハ上半年に宜<sup>レ</sup>く及<sup>レ</sup>者及<sup>レ</sup>く  
下半年に及<sup>レ</sup>く育扶ら<sup>レ</sup>く及<sup>レ</sup>者及<sup>レ</sup>彼の  
復氣と爵発とを得<sup>レ</sup>故なり。是<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>年の運  
氣と考<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>者ハ必<sup>レ</sup>年の大過不及勝復爵発  
と四時六氣司天在泉等の化と見<sup>レ</sup>く一歳の

寒熱風雨五穀の生育とるよへさるりの下  
皆此例にあらざる考見はべし

▲丁卯の年木運の不及也此年と總て季和  
と号す○丁卯ハ司天が厥陰風木に運と  
氣合とら故に天符の年とと○丁卯ハ司天  
陽明燥金に運とと故に天刑の  
年とと○丁卯ハ司天が大陰濕土に運と  
相尅するが故に不和の年とと○此季和の年  
ハ霧露厚凄冷より涼雨降風雲並興秋の氣

發行しれ木晚く穀と凋落と雖も上の  
化氣能くして万物よく秀て肉り能く充  
此年ハ木弱金勝く冷風肅殺つよけれハ必  
炎熱沸騰雷霆とく火の仕復あつ此時  
羽の浮虫盛に蠹蠅雉多の凡此年金勝木負  
時ハ木氣の鬱発と云しつ其木爵の発せ  
んととくハ必と風しなさに中脛柔中の葉  
呈陰樹木の間に自風清の湯ハ木爵の発せん  
とくの形也已に木爵の発するや埃とら雲

こころと大風吹く屋と破木と折或埃空に蔽天  
節雲横こころれども反く雨降と凡此年ハ木に  
變しと有者也木爵の発ともいハ定し時ハ  
なりと知べし○凡此年ハ鞭撻搜粟桃よく一  
切の辛物其物肉厚物濡むは物敷の堅物白物黄  
み物皆よく蒼物酸物中に核の堅のは物と  
麻李ハ此とと雞牛保虫介甲ハは虫盛ハ人身  
し亦しとと犬毛ハ虫ハ此とと然れども木の  
火の任復と木の爵発との行りはに至く麻李

蒼物酸核堅物太毛のは物俱に化と得く善と  
と有と知べし○凡此丁の年ハ黄み物肉厚  
物其物にハ蟲とさ易○丁ハ天符はく木  
運平和の年とと豊り敷和の年とと温に  
和り物よく生ト穀山木茂つと春氣平に風  
調とりと烈りとと麻李一切中に核のは物倉  
物酸物よく生ト犬と毛のは虫と盛也とと  
尤と勝復爵発等の雲氣もか○丁酉  
ハ天刑の年と雖とと一歳の化ハ反く金運

平氣の令と成り、天地清冷なりと雖、  
に枯し殺さし、惟秋風の吹落の化の候の然  
とし、飛物の生長ハ適く常の如ハ非じ、獲糶  
と桃と能生ト、白物辛物より、丁紐ハ不和の  
年と雖、とし一切の化ハ反く土運平氣の令と  
あつとく、濕化平に行われ、万物よく、滿稷稷盛  
取物、黃物肉厚物よりとこと

△己の年 土運の不及也、此年と總く甲監  
早ア、己亥ハ司天、厥陰風木は、運と尅する

が故に天刑の年とこと、己酉ハ司天、陽明燥金  
は、運と相生と雖、母の土ハ下に在り、子土  
金ハ上に在り、故に小逆の年とこと、然とし、其本  
相生故大逆の年ハ、己未ハ司天、太陰  
濕土は、運と同氣合とも、故に天符の年  
とこと、此甲監の年ハ、土の化氣より、と雖も  
物よく生じ、能長と雨或ハ降、或ハ降ずして  
時節と行つ、風寒並興、木季と雖、と實の  
つる、此年ハ總く、四足の物損下して多し

ど若此年土弱く木勝く風吹起く万物と折  
くぐく時ハ必金の仕復あつて冷氣行りし中  
木乾枯凋落しつゝ凡此年木勝土負時  
ハ土氣の鬱発とすつゝ其土鬱の発らん  
とてハ必と雲天山に横らり。蟬蟬多生下るハ  
土鬱の発とすつゝ北より已に土鬱の発するや  
雲北に奔ること。朝霞はよく巖谷の間震動し  
六七月の間に雷つゝ山澤は黄黒なる埃塵  
くらく。日と蔽其う嵐とらり。山谷の間に風

雨つゝくして山岸崩れ洪水流行て田畠  
のまこととつゝ後に雨がどよつゝ時に應ど  
此より万物始くと能生長し化まれ成凡此土  
鬱の発とらるハ六七八月の間也。凡此年ハ  
麻豆李栗よく一切濡る浮物核の堅の浮物  
鹹物酸物蒼物黒物ハ皆よ。稷粳粟肉厚物  
其物黄物ハ皆快しとこと。犬豕毛の浮虫鱗  
のふ虫盛に牛と保虫とハ快し人身し亦  
減とと然ととし右の木氣の仕復と二の鬱



発の行ふとに至く稷稷東肉厚物其物善  
物牛俛虫人身も化を得く善し有と知べし  
○巳亥ハ天刑の年と雖ども一歳の化ハ天  
木運平氣の令と成く温に和なり物よく  
生じ穀米木茂つる春氣平に風調なりて  
烈く生じ麻李一切核の堅い物蒼物酸物  
よく生じ犬と毛の浮出と盛也とことん  
し爵発勝復等の亦氣しなり○巳酉ハ小  
逆の年也然とし本相生故先ハ中分の年

とことん○巳未ハ天符に〜と土運平氣の  
年とことん号く備化とらる年の氣順に  
く万物満湿の化平に行くも總トて土  
地の化宜く調ふとことん稷稷東二其物黃物  
肉厚物より〜とことん  
▲辛の年 水運の不及也此年と總て澗  
流と号○辛亥ハ司天が厥陰風木に〜と  
運と相生〜と雖ども母の水ハ下に在る  
の木ハ上に在故ハ小逆の年とことん然とし此



水爵の発とべし此也其水爵已に発す  
や時々ど寒氣暴にいつら温氣去川  
澤嚴く炭地面白氣霜雪降く其木  
天氣くら曇昏くして清ど水に種  
亦くしと有也此爵発の行は二月より  
六月まごとの間にわつことと凡此年ハ麥  
稷粟黍よく一切肉厚物苦物甘物丹物黃物  
ハ皆よし。豆粟水氣の物鹹物黒物ハ皆  
しと馬牛羽の虫裸虫人象も俱に盛ど

飛鱗の虫ハ蚘然とし右の木氣の任  
復と土の爵発の行はとに至くハ豆粟水氣  
の物鹹物黒物飛鱗の虫皆化と得く善  
しと有と知はべし。○辛巳ハ中分の年と  
○辛未此年上半年ハ其氣順に  
く物  
く満湿の化平に行はれ總として土地の化  
宜く調は稷粟黍耳物黃物肉厚物下  
半年ハ水の平氣に静順の年と寒  
氣平に雪霜はまきと水く物

と養豆粟鹹物黑物鱗魚（辛）と（辛）  
の酉（己亥卯未）卯六年の中に於（巳）ハ（未）の二年と上（未）  
の吉年と（巳）

▲癸の年 火運の不及也此年と總（未）く伏明  
と号（未）く○癸（未）ハ司天（未）グ太陰（未）濕土（未）に（未）と運  
と相生（未）と雖（未）ども母（未）の火（未）ハ下（未）に在（未）子（未）の土（未）ハ上（未）  
に在（未）子（未）と母（未）と居所（未）の逆（未）ハ（未）故（未）に（未）逆（未）  
の年（未）と（未）○癸（未）ハ司天（未）グ厥陰（未）風木（未）に（未）  
運（未）と相生（未）故（未）に順化（未）の年（未）と（未）又在（未）泉（未）ハ少陽（未）

相火（未）に（未）く運（未）と同氣（未）相合（未）と（未）故（未）に同歲（未）  
會（未）と号（未）く平氣（未）の年（未）と（未）○癸（未）ハ司天（未）グ陽（未）  
明燥（未）金（未）に（未）く運（未）と相尅（未）する（未）故（未）に不和（未）の  
年（未）と雖（未）ども在（未）泉（未）グ少陰（未）君火（未）に（未）く運（未）と  
相合（未）故（未）に同歲（未）會（未）と号（未）く平氣（未）の年（未）と（未）○  
凡（未）此（未）伏明（未）の年（未）ハ寒（未）冷（未）拳行（未）と（未）暑（未）熱（未）  
薄（未）く物（未）生（未）と（未）雖（未）ども張（未）ト（未）難（未）く物（未）の實（未）  
と稚（未）く雪（未）霜（未）蚤降（未）虫（未）と（未）蚤藏（未）氷（未）雹降（未）若時（未）  
々（未）と（未）寒（未）冽（未）く慄（未）け（未）と（未）ハ沉（未）鬱（未）く暴雨（未）霖（未）

霽降此火弱く水勝く土の仕復也○此年  
水勝火負時ハ火氣の爵発どりあり其  
火爵の発せんところハ必と燠の如なる赤氣  
空中に繫ぐ目し明々として炎の如なる大  
暑行くと山澤燎々如く中木も津と出  
蔓川ハ焦枯天地の間蒸々として屋の棟より  
烟さら地面白氣池水減風盛に吹雨湿時  
節以後も夜半の過バ冷クなる物にも火  
に温くく人と汗と出地震雷霆とせ

に頓死の者多しと此火爵の発せんところ  
ハ華々として時分に及く水凝山川氷雪の  
南面の澤に縮氣をとりハ其兆也凡火爵の  
発するハ六七八月の間にわつと○凡此年ハ  
豆粳糯粟桃よく一切水氣の汚物鹹物辛  
物黒物白物ハ皆よく麥杏脈絡の汚物  
の類苦物丹物ハ皆快く蔬雞鱗の汚虫介甲  
の汚虫ハ多く馬羽の汚虫ハ快く然とし右  
の土の仕復と火の爵発の行くとに至る

麥杏脉絡の係苦物丹物馬羽の係虫皆化と  
得く善しと有とあるべし。癸卯ハ順化同歳  
會の年と。火運平氣の年と。此と号して升  
明の年と。暑熱衡して烈く。万物  
よく蕃く長し。天氣明に曜と。麥杏一切脉  
絡の係物の類。赤物苦物馬羽の係虫皆よく  
生と。癸卯ハ陽明燥金の司天は。く不  
和の年と雖と。此年火運不及は。く火  
尅金と免と。く有所忌司天燥金の助と得

が故に金運平氣の年と成。内經に上商ハ正  
高と同一と云ハ是  
ま。然とし在泉が少陰火は。く運と同氣  
故に同歳會と号と。亦火運の平氣とと  
然と。ハ上半年ハ金運平氣の年と。  
下半年ハ火運平氣の年と。と。然ハ  
此年上半年ハ清冷地と。と。と。妄に枯し。殺さ  
と。惟秋風の六落の化の係の。然とし。カ  
物の生長ハ迫く常の如に。ハ。と。梗糯  
桃よく生し。辛物白物よく。と。と。下半年

ハ右の癸の己亥の年の化と同さ也。癸  
丑ハ小逆の年と雖とし。本相生がらぐ故に  
大逆にハあらず。中分の年と知へも也。總  
て上より生ともハ道の順なり。下より生  
ともハ逆道なり。母下に在く。子上に居  
臣上に在く。君下に居ハ皆逆なり。故に主  
客の組合にも君火の上に相火の重は  
逆とす。はなり。

○年中の雨風善悪とら事

十一月冬至の比に雨風の甚き天変あれば  
其國の君に祟む。二月春分の比に雨風  
の甚き天變あれば大臣に祟はり。七月立  
秋の比に雨風の甚き天變あれば諸臣下  
に祟はり。八月秋分の比に雨風の甚き天  
變あれば武將に祟はり。五月夏至の比  
に雨風の甚き天變あれば民百姓に祟は  
る。十一月の中冬至より正月の節立春  
の前後まづハ正北より吹風ハ万物の生長

と致と也正南より吹風ハ人物ヲ物と損  
しと致と也○正月の節立春より二月の  
中春分の前後まごハ東北より吹風ハ  
万物の生長と致と也西南より吹風ハ人  
物と損しと致と也○二月の中春分より  
四月の節立夏の前後まごハ正東より  
吹風ハ万物の生長と致となり正西より  
吹風ハ万物と損しと也○四月の  
節立夏より五月の中夏至の前後まごハ東

南より吹風ハ万物の生長と致と也西北よ  
り吹風ハ人物と損しと致と也○五月の  
中夏至より七月の節立秋の前後まごハ  
正南より吹風ハ万物の生長と致と也正北  
より吹風ハ人物と損しと致と也○七月の  
節立秋より八月の中秋分の前後まごハ  
西南より吹風ハ万物の生長と致と也東北  
より吹風ハ人物と損しと致と也○八月の  
中秋分より十月の節立冬の前後まごハ



正西より吹風ハ万物の生長と致と也。正東よ  
り吹風ハ万物と損しと致と也。○十月の  
節立冬より十一月の中冬至前後までハ  
西北より吹風ハ万物の生長と致と也。東南  
より吹風ハ万物と損しと致と也。○以上  
の候ハ大縣各四十五六日程づつ一  
年と八段に分ち考ふしく也。○秋又十月  
中の日。正月節の日。二月中の日。四月節の  
日。五月中の日。七月節の日。八月中の日。十

月節の日。此月の前後三日の間に節風雨われ  
ハ其後四十五六日の間天地の氣調ふと云。万  
物養ひく衆人民安全に云。病も災も  
なから。若右の日より五六日し前に風雨の  
れハ其後四十五六日の間ハ雨ふびく降也。  
若又右の日より五六日し後に風雨われハ  
其後四十五六日の間ハ旱と候と云。なら  
ぬ。又南風ハ熱なり。北風ハ寒なり。西風ハ涼なり。東風ハ温なり。

南西の向より吹風ハ湿也南風ハ物と長と  
東風ハ物と至と西風ハ物の生氣と扱へば  
北風ハ物の生氣と剛なり○扱又南東の風  
とハ雨降南西の向より吹風ととも雨降北  
西の風とハ雨清なり或ハ雨の時分に西  
風はくく一とあり雨はくくこと有と  
西風されバ頓く清者也然ととも雨風ハ  
其土地の高下と陰陽の向背とけりと雲  
の起る元かより候ひと亦多くなり

○正月朔日の風雨と以年中と占事

正月朔日に雨なくして西北の方より大  
風吹ハ其年中に入多死とらるしとあつと○正  
月朔日の平且に北より大風吹ハ其春万  
民多死下るしとあり○正月朔日平且に  
大風なくとらるしとあり○正月朔日平且に  
病と多あつと大繁十人の中三人ハ病と  
○正月朔日の日中に惟北風吹ハ大凡に  
す。たを北凡にふむ。其夏万民多死とらるしと

河のり○正月朔日の夕暮に北風のききハ其  
秋方民多死とる○河のり○正月朔日終  
日北風のききハ其年中に大病葉流とる  
民多く死すること河のり大槩十人の中六  
人ハ死と○正月朔日に南風のききハ其年  
旱するに河のり○正月朔日西風のききハ其  
年國に狭い戦とる河のり人多死と○  
正月朔日に屋と破沙石と揚程の大風東  
より吹ハ其年國に大狭河のり○正月朔日

に東南より風吹ハ其春方民の死亡と河のり  
○正月朔日天氣清く温に風吹されハ其年  
五穀よくして糶し賤く方民も安全に  
く病と○正月朔日天曇く寒風吹其年  
五穀わくくして糶し貴く方民も病多  
しと○二月丑の日に風なげきハ人民  
に心腹の病多し○三月戌の日に温くハ  
人民に寒熱の病多し○四月己の日に暑  
かざれば人民熱中と病と多し○十月申

の日に寒かりしとれべ人民暴に死する人多しと云

に食し人ハ必しも...  
に事ゆつこと然と云ハ右の...  
用と其義ありと云

○酉日の風之事

世俗に酉の日風ゆきハ大風となると云ふ按  
とるに酉ハ西方金の位なり金ハ風木に勝  
者なり此日ハ風吹まらざる者なるに若風  
の時時ハ金弱く木勝反く己に勝者を侮る  
の勢ハ猛故に大風となりと云ふ恐るる事

の欲其正訛と知とて雖とも管見にゆ  
てく記と者なり

○二百十日二百廿日放生會の風之事

二百十日二百廿日ハ正月の節立春の初日。  
つと敷くつみ也放生會ハ八月十五日岩清水  
ハ播宮の御祭日也世俗の云々つとつとに  
二百十日廿日放生會に風吹とて按らるに  
二百十日廿日放生會の比ハ秋の寂中なり  
總して秋風とて秋ハ風の吹時節に

然し二百十日の比ハ早稲の花盛とて二百  
廿日ハ中稲の花盛とて放生會ハ晚稲の  
花盛とて故に若此時節に大風吹きハ  
稲と損じ必なり故に邦民此比に風の  
吹しとて恐る云々つとつと必しとて此日  
に限る風の吹しをいふと又此日の外の  
風ハ穀と損じとてつとつと必しとて總して  
二百十日廿日の比と放生會の比とにハ秋風  
吹やとてつとて然し此比の風ハ穀と損と

知はるべし。必し。此日に限る風吹く。定らんと。此日の外ハ風吹くと。此日の外の風ハ稻に中にと。總として七月中旬より八月中旬迄の。間ハ秋風吹くと。此時の風ハ穀の爲に。宜うさる也。世俗多ハ誤つと。二百十日。日放生會の日に限る風吹くと。此日と逃ぐハ風吹くと。覺しなり。

○八十八夜名残之霜の事

八十八夜し正月の節の立春の初日より。大槩三月中と四月の節との。間に有り。此時ハ主氣の少陰君火の。暄令と行ふ最中。春に残る霜も。此より消うせと降らざるが故に。世俗にハ。十八夜の名残の霜とハ。必し。此夜に限る霜の降らば。

○半夏生の事

五月の中より十一日目を半夏生とす。

此半夏と云ふは菜州生じて盛なり。世俗  
に此日天より毒降故に此日に取し菜物  
と食ざるものと云ふことせらば按どもに  
半夏と云ふ菜にハ毒氣はきくして  
生姜汁に浸て其毒と制して製は物な  
る。世俗に半夏の毒中と誤く此日ハ毒  
降りと云ふことせらば事なるん歟或人の  
曰半夏生とハ半夏正と書べし。一夏の半  
中正といふ意なるべしと実に其理のは歟

○入梅の事 並に粟花落

入梅の目法に諸説ありと後記と然と  
し今の曆に用は八時珍が本州綱目の説  
に従く五月節の後の初めの壬日に入  
六月節の後の初めの壬日に終ること二十  
一日目にしてわく 本州綱目 時珍曰入梅雨  
の氣を受まば病と生し 水部 物其氣と受け  
懲と生とと又珍藏器日梅雨衣と沾せ  
腐黒しる。梅葉の煎汁に洗へ其の

腐黒脱保余水にくハ脱とと○梅雨ハ今  
世俗にのみは少のりたり或ハ霪雨とし云  
也入梅とハ其梅雨に入の日としハ梅雨終の  
日と出梅としハつり又風俗記にハ梅の熟  
とほ時に雨降と梅雨とし又爾雅にハ梅黃  
ばと落んととる比蒸たてく雨ぬほと梅雨  
としハ○四時纂要にハ四月節の後庚日に  
入く五月節の後壬日に明とと荆楚歲時記  
にハ五月節の後壬日に入く五月中の後庚

日にのくとと○曆府通書にハ五月節の後  
丙日に入く六月節の後未日にのくとと  
○又一説に栗花落とく五月の節の後二日  
目に入く廿一日目に終と或ハ墜栗落と  
し又ハ故とし書く五月の時分ハ栗の花と  
くんとつりと雖とし此比必とと霖雨ありて  
栗の花し雨にく落故に栗花落としハ此  
説甚のやゆつたり右の本中綱目と以く  
正説ととべー



○二季の彼岸の事

彼岸の義未其正説とありと。先曆に記す所ハ二月中の日。八月中の日より三日目と彼岸の入りと。若其間に没日のまじ。四日月に記す。正日の間より或人の云。二八月の七日と神道にハ天正と名づけ。天竺にハ時正と号。大唐に彼岸とありと按じ。或釈書に彼岸ハ日の中也と註せり。此右の天竺時正と号を。係に同意せり。彼岸ハ大槩日夜の長短を

く晝夜平等の時なり。天晝ハ陽夜ハ陰也。陽の徳ハ生して善なり。陰の徳ハ殺して。悪なり。然ハ晝陽夜陰ハ善悪の兩道と。彼岸の時節ハ晝夜の陰陽平等に。善にも片寄ど悪にも片寄ぬ。善悪不二の時なり。故に釈家に專此一七日と貴て。善根と樹し。悪逆と避し。修行者於か。此が本説聞ら。ゆゆしと事なり。

○十方暮の事 並に天一天上

十方暮ハ甲申の目より入つて癸巳日迄のきて  
十日の間也。十方暮のく所の癸巳日と天一  
天上とこと世俗に十方暮と線に申ハ甲に  
のぐつと巳ハ癸に入と覚ふし甲申に今て癸  
巳にのくと以の故りり。其此と十方暮と云  
所以の義ハ此十日の間ハ十干十二支の五  
行が相尅しての故りり申ハ木申ハ金此  
金尅木也。しハ木酉ハ金亦金尅木也。丁ハ火  
ハ水此水尅火也。戊ハ土子ハ水此土尅水也。庚ハ

金寅ハ木此金尅木也。辛ハ金卯ハ木亦金尅  
木也。壬ハ水辰ハ土此土尅水也。癸ハ水巳ハ火  
此水尅火也。其丙ハ火戌ハ土此火生土にして  
相尅なり。と己ハ土丑ハ土此土支儀に土に  
して相尅の涉汰に及ばど。然ハ相尅する  
辛も月ハ八月のくこと。相尅なり。と丙  
戌己丑の目し總括く十日の間と十方暮  
とこと。其五行相尅の並する日故この間ハ  
天氣し清明なり。とて夕暮の如し是

次く十方暮と号ふ者欵○或人問く曰世  
 俗に八專に八灸せどとつふ十方暮に如何  
 ととふや答く曰八專に灸せざるの義意  
 得かこし詳義ハ八專の條下に記し十方  
 暮に八世灸と畏とと雖とし予按ず日  
 に十方暮ハ干支の五行相尅の日なれを  
 凶日にして善日にハ非と然ハ一切は用く宜  
 うはまらき欵急事にあつとバ同くハ灸治  
 毛十方暮の日と避よとくいあつと其丙戌巳丑

ハ十方暮の間日ととへー○曆家に十方暮と  
 門出に忌とす

○八專れ事 並癸亥の灸治附 八專に灸忌の事

八專ハ壬子日は入癸巳日にあきて十二日の間  
 あり其中に間日四日ある故世俗ハ八專八日に  
 間日四日と覚るあり此ハ八專と云所以の義ハ  
 此間ハ干支の五行同氣とらふと專上ある  
 者実ハ八日ある故ハ八專と号く壬子水  
 甲寅木乙卯木丁巳火己未土庚申金

辛<sup>しん</sup>金<sup>きん</sup>酉<sup>う</sup>金<sup>きん</sup>癸<sup>み</sup>水<sup>すい</sup>亥<sup>がい</sup>水<sup>すい</sup>此<sup>こ</sup>皆<sup>みな</sup>干<sup>かん</sup>支<sup>し</sup>五行<sup>ごうぎやう</sup>同<sup>どう</sup>氣<sup>き</sup>の  
 日<sup>にち</sup>のり<sup>り</sup>其<sup>その</sup>癸<sup>み</sup>天<sup>てん</sup>ハ水<sup>すい</sup>丑<sup>しう</sup>ハ土<sup>ど</sup>丙<sup>へい</sup>ハ火<sup>か</sup>辰<sup>しん</sup>ハ土<sup>ど</sup>戊<sup>ぶ</sup>ハ土<sup>ど</sup>午<sup>ん</sup>ハ火<sup>か</sup>  
 壬<sup>にん</sup>ハ水<sup>すい</sup>戌<sup>しゆ</sup>ハ土<sup>ど</sup>子<sup>し</sup>ハ水<sup>すい</sup>故<sup>ゆゑ</sup>に<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>と<sup>と</sup>間<sup>ま</sup>日<sup>にち</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>夫<sup>そ</sup>甲<sup>か</sup>子<sup>し</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>は  
 癸<sup>み</sup>の<sup>の</sup>亥<sup>がい</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>まで<sup>まで</sup>六<sup>む</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>間<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>干<sup>かん</sup>支<sup>し</sup>の<sup>の</sup>五<sup>ご</sup>行<sup>ぎやう</sup>  
 壬<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>は<sup>は</sup>十二<sup>じふに</sup>日<sup>にち</sup>あり<sup>あり</sup>戌<sup>しゆ</sup>ハ土<sup>ど</sup>辰<sup>しん</sup>ハ土<sup>ど</sup>巳<sup>し</sup>ハ火<sup>か</sup>  
 丑<sup>しう</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>戌<sup>しゆ</sup>ハ土<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>丙<sup>へい</sup>ハ火<sup>か</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>此<sup>こ</sup>ハ<sup>ハ</sup>右<sup>みぎ</sup>の<sup>の</sup>  
 八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>と<sup>と</sup>合<sup>あ</sup>せて<sup>て</sup>十二<sup>じふに</sup>日<sup>にち</sup>也<sup>なり</sup>然<sup>しか</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>も</sup>戊<sup>ぶ</sup>辰<sup>しん</sup>巳<sup>し</sup>丑<sup>しう</sup>  
 戊<sup>ぶ</sup>戌<sup>しゆ</sup>丙<sup>へい</sup>午<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>紛<sup>ま</sup>載<sup>ざい</sup>して<sup>て</sup>一<sup>いつ</sup>所<sup>しよ</sup>ハ<sup>ハ</sup>並<sup>なら</sup>ば<sup>ば</sup>ざる<sup>が</sup>

故<sup>ゆゑ</sup>ハ<sup>ハ</sup>專<sup>せん</sup>日<sup>にち</sup>の中<sup>ちゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>數<sup>すう</sup>入<sup>に</sup>ると<sup>と</sup>知<sup>し</sup>べき<sup>き</sup>なり<sup>なり</sup>の<sup>の</sup>八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>と  
 以<sup>も</sup>て<sup>て</sup>雨<sup>あめ</sup>を<sup>を</sup>占<sup>う</sup>め<sup>め</sup>よ<sup>よ</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>入<sup>に</sup>る<sup>る</sup>初<sup>はつ</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>八  
 專<sup>せん</sup>中<sup>ちゆう</sup>霖<sup>りん</sup>雨<sup>う</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>初<sup>はつ</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>清<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>なり<sup>なり</sup>ハ<sup>ハ</sup>八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>  
 中<sup>ちゆう</sup>日<sup>にち</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>復<sup>ふく</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
 又<sup>また</sup>ハ<sup>ハ</sup>八<sup>はち</sup>專<sup>せん</sup>長<sup>ちやう</sup>霖<sup>りん</sup>雨<sup>う</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>此<sup>こ</sup>俗<sup>じやく</sup>説<sup>せつ</sup>と<sup>と</sup>雖<sup>しか</sup>も<sup>も</sup>義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>が  
 き<sup>き</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>非<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>按<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>壬<sup>にん</sup>子<sup>し</sup>ハ<sup>ハ</sup>皆<sup>みな</sup>水<sup>すい</sup>也<sup>なり</sup>癸<sup>み</sup>亥<sup>がい</sup>を<sup>を</sup>  
 亦<sup>また</sup>皆<sup>みな</sup>水<sup>すい</sup>也<sup>なり</sup>雨<sup>あめ</sup>ハ<sup>ハ</sup>水<sup>すい</sup>氣<sup>き</sup>あり<sup>あり</sup>故<sup>ゆゑ</sup>ハ<sup>ハ</sup>壬<sup>にん</sup>子<sup>し</sup>癸<sup>み</sup>亥<sup>がい</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>雨<sup>あめ</sup>久<sup>く</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>水<sup>すい</sup>雨<sup>う</sup>の<sup>の</sup>官<sup>くわん</sup>なり<sup>なり</sup>  
 初<sup>はつ</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ハ</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>彼<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>身<sup>しん</sup>腰<sup>よう</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>灸<sup>しゆ</sup>治<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>十<sup>じゅう</sup>月<sup>げつ</sup>癸<sup>み</sup>亥<sup>がい</sup>の<sup>の</sup>

日と擇て行者と。其の水旺の日と取て也。癸亥ハ干支皆水よりして然と曆家は納音を以て毎日の五行と立よ。此日亦水は属し十月ハ水旺の月ととも。腰眼ハ下焦腎水を補の灸穴也。故よ十月癸亥日水旺の月日と擇て此穴に灸とる也。總して腰眼の灸ハ十月の外他乃月は致とも。癸亥は行少を宜とると故よ此穴に癸亥日に灸せば癸亥と唱ふべし。余の日は致とば。惟腰眼の灸と云べし。○或人問世俗の説

ハ八專に灸とるべしと。若灸せば同取と擇て致とも。此是るも否や。答て曰ハ專に灸せば此の義との正説と知と。夫ハ專ハ右よ記と如く干支の五行同氣とるべし。其の日のれば其太過と恐忌して灸せざと云。然れども此を信ぜど。彼春ハ肝俞夏ハ心の俞土用ハ脾胃俞秋ハ肺の俞冬ハ腎の俞ハ灸せざと云類あるべし。此皆愚医の説かり。凡肝虚と補う灸せば肝俞と春して宜ととるべし。心虚と補ふ

灸てハ心俞と夏して宜しくべし。脾胃虚と  
補うは灸てハ脾胃俞と土用よして宜しくべ  
し。肺虚と補うは灸てハ肺俞と秋して宜  
しくべし。腎虚と補うは灸てハ腎俞と冬  
て宜しくべし。其故ハ春ハ木旺夏ハ火旺土用  
ハ土旺秋ハ金旺冬ハ水旺の時也。此時々の旺  
氣の助と借て灸とべし。假令腎ハ水藏也  
腎虚と補ハ冬と灸ハ水旺の時と擇て腎  
俞。致とへし。若又腎實と泻とらうは灸てハ

腎俞と土用よとべし。土用ハ土旺して水衰  
ゆる時とるれば也。四時ハ從て五藏の俞穴に灸  
治てハ皆此例と考へ致とべし。然ハ今の愚  
医ハ四季子ハ從ぬ五藏五行の衰旺とし考へ  
どして妄よ忽て肝の俞ハ春灸てど心  
の俞ハ夏灸てど脾胃の俞ハ土用よ灸てど  
肺の俞ハ秋灸てど腎の俞ハ冬灸てどと覺  
れハ甚あやまらるあり彼腰眼れ灸と十月  
癸亥の日水旺の時と擇て行ふと以て知へ

きあり近世日は医風薄く其学も熟でと  
して治療を施し偶中あれば已や上手  
かと思て人と侮り高く坐せし者  
多し其意自辱ありありの専日  
と宿曜經は八專日は冥衆悉天上とるが故  
下界に聖衆の影向あり之は依て大唐顯  
徳第四丁巳年以來一切の佛事は此日と  
忌むる○曆家に間日の中辰午は日ハ保儀  
は當て吉日とす丑未の日ハ伐日に當て專

日よりも悪日とと右の兩説ハ俱に陰陽家  
の義にして取用るふ足と

○土用の事

凡正月朔日より十二月大晦日まで一年ハ  
三百五十四日三十七刻也此月の一年なり日乃  
一年ハ三百六十日あり天の一年ハ三百六十五日  
二十五刻あり春夏秋冬ハ四時ハ此天の一年よ  
り立るあり然ハ曆の正月朔日より十二月晦日  
まで三百五十四日三十七刻ハ四時の三百六十

五日二十五刻と合して見れば大なる不足あり故に二年  
に日月ありて其不足の日と足て行故に四時が  
違ひて調るが若し一度困と置ざれば春  
一月が夏は八十一月が十二月は入三度困と置ざ  
れば春の季皆夏と成十二度困と置ざれば  
子の年が皆丑の年と成あり日月を以て彼  
不足と足とごとく四時差とごとく万事が調り  
て行るものあり扱三百六十五刻二十五刻の二年  
と四時は分て見れば九十一日三十一刻十五分宛

あり然るに此小ては春木夏火秋金冬水に  
て五行の中四行ありて土の一行足ざるが故  
に土用ありて一年は五行全く具る也初土用  
は三六九十二月とよは其節は入一時刻より  
十二日二時餘と過て土用は入直は其入時刻  
限より又十八日三時餘の間と土用とを但土用  
の終は入夏立秋立冬の入刻が限あれ  
ども古より暦は入夏立秋立冬の春の前  
日よ記し來り初右の一年三百六十五



二十五刻と四は分りて九十一日三十一刻十五分  
宛の中より土用ふ十八日二十六刻十五分宛  
ひききて見八十三日五刻宛にあるあり扱又  
四土用の各十八日二十六刻十五分と合して  
見此し亦七十三日五刻はありて一年の  
五行の日數は平等なる事ありの古より  
曆は土用の間日と付來り然れども土用に  
間日あるの義その正説と知れど信難と  
此陰陽家の法よりして用るは足ざるなり

○或人問世俗土用は灸せむと云ハ本説ありや  
否答て曰土用に灸せむるは義医家の正説  
に於て考あり此亦前に辨む如く若脾  
胃不足の症は脾の俞胃の俞等に灸して補  
ふんぞありて及て土用は灸して其土旺の扶  
ありて河あり者欲總して鍼灸は日忌時  
と忌乃義本医家の正説は非ず若急症は臨  
て日忌時を忌む間ありは直に脱命せむんば  
あり此皆陰陽家の臆説取は足らざるとす

若或ハ其命完とあり或ハ灸と云ふべし  
乃症に灸して中たる日時が自然たるを忌  
ところの日時よはあらば此等の日の崇時  
のしるめありと云此皆愚者の意ありの土用ハ  
四季よめられど夏六月の土用と貴じ者ハ六  
中央とまじり火と母と金と子とと六  
月ハ夏の火と秋の金との間うして火生土  
土生金の位との上二年の中央あれば分て  
此土用と貴らとあり故よ六月の土用と

長夏と号するも夏の火より生長し  
土用と云意ありの惣して土用ハ凶日よハ  
非下りしれども土と動し竹木と切掘り  
事よハ絶て用べし  
○塩の満干此事並知死期  
凡月の出入満鉄雨の降時人の生死ハ皆  
塩指引の時により然れば塩時と知で  
あまぬらあり

○毎日塩満干大法

朝日 大塩朝の六四分と晩の六四分とい  
 満して昼の九四分と夜九四分とよ  
 千あり  
 二日 朝の六八分と晩の六八分とよ満て昼  
 の九八分に千あり  
 三日 中塩朝の五二分と晩の五二分とい  
 満て昼の八二分と夜八二分とよ千あり  
 四日 朝の五八分と晩の五六分とよ満て  
 昼の八二分に千あり

五日 昼の四と夜の四とよ満して昼の七と  
 夜の七とよ千あり  
 六日 昼の四四分と夜の四四分とよ満て夜  
 の七四分よ千あり  
 七日 小塩昼の四八分と夜の四八分とよ満  
 て昼の七八分と夜の七八分とい千あり  
 八日 昼の九二分と夜の九二分とよ満て晩  
 の六二分よ千あり  
 九日 昼の九六分と夜の九六分とよ満朝の六

六分と晩の六六分とよ千あり  
十日長塩昼の八と夜の八とよ満て夜の  
四よ千あり  
十一日昼の八四分よ満宵の五四分と朝の  
四分とよ千あり  
十二日昼の八八分と夜の八八分とよ満て宵  
の五八分に千あり  
十三日昼の七二分と夜の七二分とよ満夜の  
四二分と朝の四二分とよ千あり

十四日大塩昼の七六分と夜れ七六分とよ  
満て夜れ四六分に千あり  
十五日大塩晩の六と朝の六とよ満夜の九と  
昼の九とよ千あり  
十六日晚の六四分と朝の六四分とよ満夜の九  
よ千あり  
十七日晚の六八分と朝の六八分とよ満夜の九  
八分とよ千あり  
十八日中塩宵の五二分と朝の五二分とよ満

て夜の八二分に千あり

十九日 霜の五六分と朝の五六分とよ満夜の

八六分と昼の八六分とよ千あり

廿日 夜の四と昼の四とよ満て夜の七に

千あり

廿一日 夜の四四分と昼の四四分とよ満夜の

七四分と昼の七四分とよ千あり

廿二日 小塩夜の四八分と昼の四八分とよ満て

夜の七八分とよ千あり

廿三日 小塩夜の九二分と昼の九二分とよ満

朝の六二分と晩の六二分とよ千あり

廿四日 夜の九六分と昼の九六分とよ満て朝

の六六分とよ千あり

廿五日 長塩夜の八と昼の八とよ満朝の五

と夜の五とよ千あり

廿六日 夜の八四分と昼の八四分とよ満て

朝の五四分とよ千あり

廿七日 夜の八八分と昼の八八分とよ満朝の

五八分と膏乃五八分とよ千ヤリ  
 廿六日夜の七二分と昼れ七二分とよ満て  
 二昼の四二分と千ヤリ  
 廿九日大塩夜の七六分と昼の七六分とよ  
 満昼の四六分と夜四六分とよ千ヤリあり  
 晦日朝乃六と晩の六とよ満昼れ九と夜  
 の九とに千ヤリ 此大の月の晦日ヤリ  
 右ハ塩満千の大法也又知死期ハ毎日夜  
 の塩の指始め塩乃満つめ塩乃引始め塩の

引詰にあり  
 ○知死期ハ昼二度夜二度昼夜は四度な  
 り此が上旬中旬下旬の不同あり大方  
 人間の死とるハ其生一知死期は終者  
 たり然れども知死期とられよ生れあり此  
 ハ其母と子との虚実と其養生不養  
 生と又天氣乃寒熱とよ從てヤリ  
 又死とるし知死期よとるあり此も  
 其病の輕重有餘不足と又其能食と

流して食でござるものと又天氣の寒熱とに従  
て、早り扁鵲が能食とる者ハ期は過食  
七ざる者ハ期は先つと云ハ此なり

の知死期上旬中旬下旬の法

朔旦日九日十日昼の九夜ハ九朝ハ六晩ハ六なり  
三日四日五日ハ昼ハ八夜の八朝ハ五宵ハ五あり  
六日七日八日ハ昼の四夜の四明七晩ハ七なり

右上旬ハ分也

十一日十二日十三日十四日十五日ハ明七晩ハ七昼ハ四夜ハ四なり  
十六日十七日十八日ハ夜ハ九昼ハ九朝ハ六晩ハ六あり

右中旬の分也

十九日二十日廿一日廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日  
ハ明七晩ハ七昼ハ四夜ハ四あり  
廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日  
ハ夜ハ九昼ハ九朝ハ六晩ハ六あり  
廿六日廿七日廿八日廿九日ハ夜ハ八昼ハ八朝ハ五宵ハ五あり

右下旬の分也

云ハ知死期と云ハ皆毎日の塩の指引月の  
中入持たり此塩時ハ潮のときと惣一

下天地此間の諸水の往來も時刻あり  
此塩の指引は天地の呼吸なり人間の息ハ  
晝夜一萬三千五百息あり天地の息ハ晝夜  
二惟二息ありて晝指塩三時引塩三時  
夜も指塩三時引塩三時也晝夜の間に四度  
の指引あり此を知死期と取ざり月の出  
入も雨の降晴も皆此より従ふあり

○二十四氣七十二候の事  
夫年中の氣の移りもろろ大小の目あり先

春夏秋冬の四季ハ大なるよりめざり極  
又五日め宛より有りて此と一候と云細い  
辨用  
とらば五日七刻  
十七分五厘也此が一年に七十二度ありて七十二  
候と云ざり極又十五日め宛より有りて此  
と一氣と云細い算用  
五十一分五厘なり此が一年に  
二十四度ありて二十四氣と云とみざり  
二月の節と中とざり此二十四氣ハ四季  
よ次でのろろあり七十二候ハ其中の細  
ざらざらざり總して天地の寒熱風雨を



中木の花さか実のるし鳥獸の翔走し其  
外諸虫の働き等までも皆此二十四氣  
七十二候の度毎よ其氣をりて候いあれ  
事たり况人間ハ猶以此度毎其氣ハ確  
て行と知べし惣して春夏秋冬ハ四季  
が一年よのこ有ハ非どとらう一昼夜ハ  
よし此分ある事たり朝ハ一日ハ中ハ春  
とと故よ人の氣さよやうして病を輕  
し日中ハ夏とと故よ人の氣ハ長とて

上家のふ  
祭の利

病安らざる日暮ハ一日ハ中の秋とと故  
よ人氣ハ衰へて病加ふる夜半ハその一日ハ  
中ハ冬ととと故よ人氣ハ沈みて邪氣進  
病甚しきたり此灵柩ハ順氣一日分爲  
四時篇の法たり  
○冬ハ至の事 並亥子の義  
世ハ正月三ケ日と以賀者ハ此日の始月  
ハ始歳の始ハ然とて一歳ハ中に  
於ハ貴き事十一月冬ハ至ハ勝ハあると

子の時ハ  
十一時  
間

十一月冬至の夜半子の時一陽の氣  
來復して此其年中の人身万物一  
切の生氣の根とあることあり故に古より  
禁中よ八朔且冬至の御賀あり今を  
禪家よハ冬至と賀事他よ殊なり  
又世よ十月亥日毎に賀して俗亥子と  
号按とるよ十月ハ亥なり十一月ハ子と  
子ハ北方の一陽來復の氣なり亥ハ子に  
前とと故に亥の月肘の亥れ日亥れ時を

子の時ハ  
九時十時

祭て來十一月冬至來復の子と待者か  
し凡一歳人物生云の氣ハ冬至夜半子  
の時より始り一月の生育ハ昨夜の九  
子の時より始る物也して北方子の氣  
程貴きいあり天地万物生化の本源な  
り故に天子常に北宮に位し南面を  
て政を行はせ給とるや

○追加

或人問て曰正徳四甲午年八月中旬より九月

よ至て雲北方よ走天曇て霖雨行りて湿化  
盛りり其たぬく晴時ハ甚熱して夏ハ  
如く其曇て霖雨ある時ハ暴よ寒して冬  
の如く此何や吞て曰此年甲よし土運  
ハ太過とて土化ハ雨湿あり且四の氣ハ主客  
俱よ太陰湿の冷あり四の氣ハ六月の中五ハ  
客氣ハ少陽相火よしして熱とて五ハ八月の中  
至ぬ六の氣ハ客ハ陽明金主ハ太陽寒水なり  
十月の中其雲北方よ走曇て霖雨ある

者ハ四の氣ハ主客合して太陰土の湿化と此  
甲土運太過の湿化加且又秋湿とて八九  
月の比ハ常ハ雨湿の行る時とて素問ハ七  
秋湿ハ傷るれば冬咳嗽と患と云ふ此の  
然ハ秋湿の上ハ右の主客合して土の湿化と  
年土運太過ハ湿と此四ハ湿氣と重合て  
天曇て晴と惟ひとて霖雨下て  
湿氣盛ると致と其たましく晴時  
ハ甚熱して夏の如きハ客ハ五ハ氣少陽

相火の勢いかりなり又其曇曇りて霖雨霖雨ある時  
ハ暴たけなよ冷ひやてくこの如ごとき者ハ六の氣きの客きやくハ  
金かねよりして冷ひや主しゆハ水みづよりして寒さむいど其金水  
冷ひや寒さむの氣きと合あせて冬ふゆの氣き進すすむ故ゆゑなり  
何なんの疑うたがい有あることあり管見くわんけん如此ごとくと雖など  
其必然いっぴんと知しると後の君子こうし此これ及およばざるを  
改あらため正たださん事ことハ請まをすと云いふ爾なり  
年中運氣指南終

小高 坂曲山

正徳五乙未歲

正月吉日

京師小路通堀川東江入町

書林 中川茂兵衛藏板

